

Title	原淳一郎君提出博士学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2007
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.76, No.1 (2007. 6) ,p.137- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070600-0137">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070600-0137</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

原淳一郎君提出博士学位請求論文審査要旨

論文題目 『近世寺社参詣の宗教文化史的研究』

原淳一郎君の博士請求論文『近世寺社参詣の宗教文化史的研究』は、序論と終論、本論十一章からなり、総頁数は三六六である。

序論

第一部 寺社の宣伝性と都市社会

第一章 近世名所寺院の経営と宣伝活動

第二章 伝承成立の歴史的考察と宗教的介在者

第三章 近世寺社参詣における御師の役割

第二部 参詣意識と都市社会

第四章 山岳信仰と都市社会

第五章 参詣地名所と都市社会

第六章 都市近郊名所と都市社会

第三部 参詣行動と都市社会

第七章 参詣行動の歴史的考察

第八章 参詣行動と行動文化

第九章 参詣行動と歴史意識

第四部 行動文化論と近世寺社参詣

第十章 行動文化論と聖俗論

第十一章 近世寺社参詣の文化人類学的考察

終論

第一部「寺社の宣伝性と都市社会」は、人々を参詣につなげるための寺社側の積極的行動を、具体的事例によって明らかにしている。このうち第一章「近世名所寺院の経営と宣伝活動」は、由緒の欠如しているが故にほとんど幕府の寺社助成政策の恩恵に浴さなかつた成田山新勝寺が、なぜ「名所」となって現代まで多くの参詣客を集め続けているかに注目したものである。はじめに寺の収支帳簿により、臨時収入に頼らねばならない経済構造を分析したうえで、このことが数多くの江戸への出開帳という行動に直結し、結果的に江戸庶民への宣伝活動となって新勝寺へ多くの参詣客を呼び込んだと指摘する。第二章「伝承成立の歴史的考察と宗教的介在者」及び第三章「近世寺社参詣における御師の役割」は、江戸庶民の参詣客集中に、御師や先達といった「宗教的介在者」の働きが重要だったと指摘する。事例として霊山とされる富士山と相模大山への参詣推進をとりあげ、双方への多くの参詣客は「片参り」忌避の伝承を利用した大山御師、および富士山の須走村・須山村の御師たちの宣伝

活動によって導かれたもので、「セット化された参詣」が正当化されるまでの過程を詳しく検討している。参詣を推進するための宣伝活動は、御師たちが寺社から離れて都市や農村部へ出かける「檀廻り」にも持ち込まれている。ここでは大山御師村山坊の史料を手掛かりに、檀家の保有形態を都市と農村、あるいは職業別に検討し、初穂料の格差、土産物など配り物の差異を分析することによって、地域によって御師の果たす役割とその相違点、あるいは定期的な集金システムの存在を明らかにしている。

第二部「参詣意識と都市社会」は、参詣者が寺社側に求めたものを探り、そこから都市社会に生きる人々の参詣意識と「行動文化」のありかたを考察したもので、本論文の中核をなすものである。このうち第四章「山岳信仰と都市社会」は、古来より霊地として知られた相模大山に対する江戸庶民の信仰意識についての考察である。ここではまず参詣客の職業にかかわる史料を手掛かりに、江戸の住民のなかでもとくに鳶職・石工といった特定の職能集団が大勢を占めていた事実を明らかにする。さらに大山詣でに関する川柳を集め、かれらの参詣目的が一樣に賭け事の「勝運守護」にあったことをつきとめている。しかも大山参詣には、事前の潔斎儀礼として両国橋東詰、および大山麓の滝の二度にわたる垢離取りの行が求められている。懺悔して穢れを落とし、真摯に神仏に向き合おうとする参詣者の信仰意識は、非日常に身をおくことで現実的な自己解放をはかり、いっほうで現世利益を求めようとする意図と強く結びつい

ていると論じる。第五章「参詣地名所と都市社会」は、現世利益を求めようとするものの、なおも現実から脱しきれない自己矛盾を解放するために、さらなる名所を必要とした参詣者の意識を探っている。ここでは事例として弁財天信仰で知られる江ノ島に注目し、大山よりも信仰的側面が薄いながらも、景色と古跡、そこに鮮魚料理の提供という食文化が加味されたことにより、「遊人」と称する旅人が集う場になったとする。距離的な関係で、伊勢参りに江戸の男性が向かったことと対照的に、江ノ島参詣には江戸の女性客が多く参加し、そこにお茶やお花などとは異なる「行動文化」の対象としての名所が誕生したと論じる。第六章「都市近郊名所と都市社会」は、病氣治療という現世利益を求める参詣者の存在を明らかにしている。事例としては、下北沢淡島社の別当、森巖寺で行われた「夢想の灸点」という灸治療をとりあげ、三・八の施灸日は江戸町民の年中行事として定着したほどの賑わいぶりであったとする。さらに寺社側に残る史料から、参詣者の居住圏が寺社を中心とする円心状ではなく、街道に沿った楕円形をなしていたことを明らかにしている。たとえば大山街道の東は渋谷・青山・麴町・赤坂・麻布・芝・三田が参詣者の住居圏であり、また西は深沢・新町・用賀につながる圏内、さらに甲州街道沿いの幡ヶ谷・代々木・深大寺といったいくつもの参詣圏が存在し、支配領域とは別個に、町民独自の相互交流によって参詣圏の拡大がはかられた背景を明らかにしている。

第三部「参詣行動と都市社会」は、寺社に参詣する人々の行

動そのものを分析している。このうち第七章「参詣行動の歴史的考察」は、大山参詣が大衆化するにしたいが、参詣行路に変化が生じ、やがて宿場町の間で顧客獲得をめぐる争論が発生するに至る歴史的背景が明らかにされている。第八章「参詣行動と行動文化」は、現存する道中記五〇点の記載内容を詳細に検討し、人々の行動ルートを分類化している。これによって、近世の「旅」は物見遊山の要素の強いものとする従来の説に対し、むしろ参詣地と名所との結びつき、あるいは参詣地とそれ以外の地域の巡礼との結びつきによって成り立っていたとして、人々の意識のなから信仰的要素を除外することができないと示唆している。第九章「参詣行動と歴史意識」は、江ノ島とは異質の観光対象となつた鎌倉のあり方について考察している。とくに近世の鎌倉は、水戸学派を代表する徳川光圀自らの現地調査によって権威ある名所としての原型が形成され、都市知識人層が抱く過去への懐古の情を体験する場として「再発見」されたとする。彼らの参詣行動は、都市中下層民のものとは異質であり、それ故に参詣層の拡大する近世中後期以降の寺社参詣と同一に論じられない要素があると指摘している。

第四部「行動文化論と近世寺社参詣」は、第一章〜第九章までに得られた知見をもとに、寺社参詣を定義するうえで重要な「行動文化論」の再検討を行っている。ここでは近年の議論が、上層町人の残した史料から導かれる傾向にあることを批判し、むしろ参詣者の大半を占めた都市中下層民の参詣行動を復元することが重要であるとし、さらに考察にあたって歴史学、文化

史、宗教史のみならず、欧米の聖俗論や文化人類学的な成果などを積極的に取り入れて検討している。

#### 審査報告

本論文は、人が寺社へ参詣する行為を問題の中心に据え、寺社参詣が盛んになつた近世における人々の行動・意識を、歴史資料はもとより、文芸作品、道中記、案内記などを分析することによって、これまで歴史研究ではあまり見えてこなかつた寺社側と参詣者側の双方の意識を探りながら、参詣をめぐる大衆化現象の要因と近世宗教における行動文化の意義について追求したものである。

日本近世史のなかで神社、寺院、山岳聖地をとりあげる場合、これまでは政治史あるいは宗教史の一分野として、幕藩権力による宗教統制策の視角から問題が提起されたり、あるいは門跡や本末関係、本所論、檀家論などが議論の対象とされることが多かつた。近年にいたり、かつて新城常三氏が提唱した寺社参詣の大衆化現象が再び注目されるようになり、宗教社会史、あるいは文化史や地域史の一環として、具体的な参詣実態の解明が試みられるようになった。この場合、神社、寺院、山岳聖地ごとに研究が進められ、寺社参詣の全体像を見通したうえで分析、とりわけ大衆化現象を近世史のなかに位置づけ、要因を究明するまでには至っていない。最近の文化史研究において、寺社参詣は「行動文化」のひとつととらえられる傾向がある。「行動文化」とは、江戸町人文化の研究者西山松之助氏によつ

て提唱されたもので、たとえば茶の湯、生け花、踊り、音曲、花見、湯治、納涼、開帳、寺社参詣などを文化的行動ととらえ、人々はこれらの行為に参加することにより「自己解放」を志向したと理解されている。

本論文では、まずこのように概念化された「行動文化論」に、寺社参詣をそのままではめようとする最近の風潮に疑問を呈示している。その中核ともいえるべき「自己解放」の理解についても、寺社参詣の場合は「身体的自己解放」と「精神的自己解放」の両面から分析することを主張する。このうち「身体的自己解放」については、相模大山における「勝運守護」を願う参詣者を事例に、現世利益を求めながらも信仰に真摯に向かおうとする庶民の意識を明らかにしている。また「精神的自己解放」では、寺社参詣を名目になされる旅への志向をとらえ、大山と複合した藤沢宿、江ノ島、鎌倉が、参詣者の相互参入によって複合化し、大きな周遊地となる過程を議論している。また人々はいくつかの霊地や道中で「精神的自己解放」を行うが、いくつかの霊地では「身体的自己解放」を行い、筆者はこうした行動を「循環的行程」と定義する。寺社参詣の特色は、そうした自己解放の出し入れを自由に行っていた点にあり、大衆化のなかで聖性を維持する手段であったと興味深い議論を展開している。このほか下北沢村淡島神社をとりあげ、都市近郊という日常圏における自己解放について考察している。そこでは淡島信仰の背景で、定日ごとに神社側が「夢想の灸点」を施している史実を確認し、参詣が日常生活に密着した現世利益を求

める人々によって担われたという新しい見解を示している。これらの議論は、「自己解放」を無目的・即時的な行動とする従来の「行動文化論」への具体的な批判となっており、既成の概念にとらわれない示唆に富む論考となつていゝ。論証にあつて、歴史資料に加え、川柳や道中記、旅日記など文芸作品の使用方も効果的であり、充分な説得力もある。

本論文の歴史学としての成果は、人々を寺社参詣に促すため、寺社側および御師による積極的な営業活動に注目し、寺社参詣の大衆化現象の要因を説明しようと試みた点である。事例としてとりあげた成田山新勝寺は、由緒が無いため幕府との関係において最下層に位置づけられ、独自の宣伝活動を取り組まざるをえなかつたとし、幕府の手厚い保護(助成金や勸化御免)を与えられていた相模大山と比較検討することによって興味深い議論を展開している。とくに新勝寺の開帳を基盤とした経営戦略のなかから、近隣農村と寺との協力体制が生まれ、仏事以外のイベント的なものを取り入れる姿勢と一体化した、特色ある寺運営が展開されていったことを、寺側の帳簿類を用いて説明している。さらにこうした協調体制が、幕府崩壊後、明治期の神仏分離に対する大山との対応の違いとなり、神道国教化政策の影響を受けずに、さらなる発展を続けることが可能になったと結論づけたことは卓見といえる。

御師の活動としては、富士山と相模大山の二カ所をセットで参詣する形態に、御師が深くかかわっていたと指摘している。宿帳のみでは不十分な参詣実態の解明に、文芸作品を利用した

点も斬新的である。セット化の興隆に伴う旅人への荷物輸送サービスに、切手によって運ぶシステムを指摘したことも興味深い。都市における御師の檀廻りについて研究したものは皆無にひとしく、御師側の史料から江戸檀廻りの実態を解明し、下層民（店借層）を対象とする個人檀家と講との別を指摘した点は十分評価できる。個人檀家は直廻り、講は置札という檀廻りの形態の違いを指摘したことも新たな知見である。なお御師側からみて置札形式は重要視されず、したがって講は御師が期待するものではなかったと結論するが、それでは明治以後、なぜ講が残ったかという疑問が残る。

本論文の特徴は、研究対象の中心を江戸の一般民衆と呼べる中下層民にしたことである。この点、従来の「行動文化論」で使用された史料が、江戸町人のなかでも上層の知識人に限られており、江戸庶民を均質化して導き出した結論への歴史学的批判となっている。筆者は、寺社参詣の大衆化現象をみるには、江戸中下層民の参詣行動や参詣意識の分析こそが重要であると主張し、その一方で欧米の文化人類学、社会学、宗教学における巡礼（参詣行動）にかかわる議論の紹介や日本の聖俗論の概観も丹念に行い、序論における丁寧な研究史の整理とともに、幅広い観点からの議論の構築の跡が窺える。近世の寺社参詣を、階層ごとの意識レベルで読み解くために、歴史的名所の多い鎌倉への参詣行動の実態を事例に、旅日記を利用して検証している点も興味深い。都市知識人層によって再発見された鎌倉が、知識欲的参詣に基づく「三所巡り」を繰り返す反面、村落内上

位層へ拡大した参詣層は依然として従来型の参詣パターンに留まるといって、二種類の行動を分析した点は評価できる。しかし村落内上位層における歴史的素養の有無や、史実を考証できる高度の知識人の有無などが、旅の目的、参詣コース決定にどのような影響を及ぼすかについてはまだ検証されておらず、従来の参詣パターンについても他地域との比較分析が希薄である。庶民の寺社参詣の事例としては、大山における参詣客の多くが、鷹職・石工といった特定の職能集団が大勢占めていた事実を明らかにしたうえで、「勝運守護」がやがて「商売繁盛」へと発展する過程を実証している。また下北沢の祈祷檀家の実態、日常的生活圏における参詣客の分布などは、印刷文献のみならず現存する古文書類を用いて微視的に明らかにしたもので、筆者の古文書解読の力量を窺わせるものがある。そこでは大勢の庶民の名前が明らかにされているが、なかには屋号を持つ者も多く含まれており、「幅広い階層」とひとくくりする前にもう少し緻密な分析が欲しいところである。

#### 総評

本論文は、江戸都市民の参詣行動を寺社側と参詣者側の双方から、それも一階層、一カ所にとどまらず、複眼的な視角から分析を行い、「身体的自己解放」と「精神的自己解放」という概念を設定し、参詣地のセット化とも関連させて論じた点に最大の功績がある。このセット化の成立背景に御師の存在を指摘し、どちらか一方の「片参り」を忌避する伝承を手掛かりに、

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学大学院文学研究科教授 文学博士 田  
代和生  
副査 慶應義塾大学名誉教授 文学博士 宮家 準  
副査 東京大学史料編纂所教授 博士(歴史学) 佐藤孝之

セット化を近世寺社参詣の特徴として位置づけた点は新知見として評価できる。従来の「行動文化論」に対する批判としての意義が認められるが、一方で整合性を試みたためか分析が曖昧になっている面はある。大山の「勝蓮守護」、新勝寺の「開帳」、淡島社の「夢想の灸点」、江ノ島・藤沢・鎌倉の「名所発見」という史実を指摘したのは卓見だが、それぞれの参詣を「身体的」「精神的」と峻別するのが適当かという点も含めて、さらに検討の余地はあるものと考えられる。また第四部で文化人類学・社会学で提起される「祭りモデル」は、原罪を前提とするキリスト教の祭りの分析に基づくもので、日本に適用するには問題がある。このほか、用語の設定、定義づけの面で今後研鑽を積むべき課題もある。御師に「宗教的介在者」の語をあてることは問題があり、このほか「仮想的集団昂場儀礼」や「簡易型」参詣など、論文に用いる用語や術語の使用は慎重になさるべきである。しかしこれまで歴史的分析には積極的に利用されてこなかった文芸作品までも有効に活用し、江戸町民の参詣行動、とりわけ参詣の大衆化現象を説明するために欠かすことのできない都市中下層民の動向を明らかにするなど、当該研究の分野においては従来の研究にない新しい成果を十分あげている。以上の理由から、審査員一同、本論文が博士(史学)の学位を得るにふさわしいものと判断するものである。